慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ロイ・ ポーター著 狂気の社会史
Sub Title	
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1993
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.86, No.3 (1993. 10) ,p.328(166)- 332(170)
JaLC DOI	10.14991/001.19931001-0166
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19931001-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」86巻3号（1993年10月）

書　評

ロイ・ポーター著
『狂気の社会史』

叢書・ウニベルシタス408
目羅公和訳
（法政大学出版局　1993年，4300円）

「気が狂う，というのはどういうことなのであろうか。本書はおよそ20人ほどの『狂人たち』の人生を，彼ら自身が記録したままに探索していくものである。」このように書きだすロイ・ポーターは，社会史の方法的特徴である「下からの歴史」を狂気にも適用し，政策担当者や医者の眼ではなく，患者の眼を通して狂気の歴史を描こうとした。「私はまず第一に狂人の頭の中に入りこみ，彼の観点から，内側から，彼が何を言い考えたかを理解しようと努めてきた。」（参考書目 p.(12)）という。そこで採られたのが，患者の自伝，回想録を分析するという方法である。

著者ロイ・ポーターは1946年生まれ。ケンブリッジ大学のクライスト・コレッジを卒業後，74年に博士号取得。79年にケンブリッジからロンドンのウェルカム・インスティテュートに移り，91年からそこのリーダーとして病気の歴史に取り組んでいる。この研究所は熱帯医学の研究のためにウェルカムが私財を投じて設立したものであり，現在イギリスにおいて人的・財政的に医学史研究の中軸になっている研究機関である。ポーターの著作の生産性は驚くべき高さであり，毎年夥しい数の著書，編著，論文が世に問われている。病気の社会史，精神病史だけでなく，科学史，社会史とかれの射程領域は極めて広い。（邦訳書も『健康売ります―イギリスのニセ医者の話　1660―1850』田中京子訳　みすず書房，1993年。等がでている。）私は今から5年ほど前，ロンドンのウェルカム・インスティテュートで開かれたセミナーに社会史の泰斗エイサ・ブリッグスがベツレム精神病院の研究報告をするというので参加したことがあったが，そのとき司会をしたのがポーターだった。ブーツに革ジャンパーという姿で髭をはやし，山の中から出たきた熊のようであったが，頭の回転がはやく語り口はソフトだった。それと前後して，ニューカッスルで開かれたヒストリー・ワークショップ全国大会では，ポーターが17世紀から19世紀にかけてのアサイラムについて報告し，時代とともに外壁がしだいに高くなって，収容者が外界と物理的にも隔離されていくことをスライドで示したことがあった。

ところで，ポーターは精神病の歴史研究史のなかでどこに位置しているのであろうか。K.ジョーンズとR.ハンターが精神病患者にたいする対策史を福祉の増大としてナイーヴに書いたのは，1950年代と60年代の初めであった。社会関係を捨象し，もっぱら医学的アプローチから精神病理学を進歩の過程と捉える伝統的なものであったが，こうした方法に衝撃をあたえたのは，いうまでもなくフーコーの『狂気の歴史』（1961年）であった。18世紀末の一連の物理的拘束具の撤去，すなわち，イタリアのチウルギの試み，フランスのピネルの試み，ドイツのワグニッツやライルの試み，イギリスのW，テュークの試みによって，物理的拘束は撤去されたけれども，それに代わって医者による精神的拘束がはじまり，患者は監視され従属され「閉じ込められた」とするのである。それは，精神病理学そのものの存在意義を根底から問いなおしたものであった。このフーコーの捉え方は，1960年代・70年代に大きな影響をあたえ，トマス・サズ，D.ロスマン，R.D.レイン，A.スカル等が反精神医学の主張と運動を展開する。たとえば，サズは，『狂気の製造』（1970年）のなかで，精神医学が狂気を「発明した」といい，精神病院に虐待があったか否かが問題なのではない，「既存の精神医学それ自体が，虐待なのである」という。

このような「修正派」にたいする疑問や批判は，

1970年代末から80年代に現れてくる。その方法は，個別のアサイラムや収容者を具体的・歴史的に詳細に分析し，その作業を重ねるものであり，アプリオリな理論を前提としない点に特徴がある。たとえば，A.ディグビーはヨーク・リトリートを設立以降1815年までとくに財政構造を中心に追跡する。ロイ・ポーターはこの「修正派」批判の代表的な研究者である。

本書は病気の医学史でも精神病学史でもない。著者は，「私の狙いは精神病学的でもなければ精神分析学的でもない。私は決して狂人の発言や著作や行為を精神病学の理論に照らして解読してみようとも，狂人の実際の病気ないし症候群を明らかにしてみようとも，また狂人の行動の『真』（すなわち無意識）の意味を発見してみようとも思わない。」（pp.3-4）という。一介の歴史家がそのような研究を手掛けるだけの資格があるとは思えない，として，「それよりも，私は狂人の無意識ではなく，狂人の意識のほうを詳しく調べてみたいと思う。行間を読んで隠れた意味を探し出し失われた子ども時代を再構築して声にならない欲望をあらわにするのではなしに，狂人が言いたかったこと気にかけていたことのほうを，私は探索してみたい。」（p.4）というのである。クレペリンの早発性痴呆症（のちに精神分裂症と命名された）に典型的にみられるように，一般に精神病学者たちは，狂人の言うことは理解できない，不合理なこと，意味のない戯言と考えてきたが，狂人の自伝はそのようなものではない。長いあいだ「医者や専門家は狂気にも道理があることなど信じていなかった。」（p.10）のにたいし，「狂気には狂気なりの筋道がある」といっているのである。しかし，著者の主張はそれにとどまらない。「医者」と狂人の関わりをみていくと，「どうも多くの場合，公平にみて，人間性とか常識というものが狂人の側にあると思えてならない。」（p.6）というのである。もちろんポーターは反精神医学の立場でそう主張しているのではない。その「医者」と狂人との出会いと関わりをみていくのが本書の目的である。

何百と書かれた狂人の自伝のなかから20ほどを選び，具体的にかれらと医者との間の格闘を叙述していくのだが，まず狂った王として有名なジョージ3世と医師ウィリスが3章「狂気と権力」で，ヴァージニア・ウルフ，シューマン，ニジンスキー，ジョン・クレア（農民詩人）が4章「狂気と天才」で扱われる。ニジンスキーは「シューマンの悲劇よりもなお悲痛な結末」になった。かれは医者を信じなかった。「かれらのいう人生は死の痕跡であった。かれらの標語は科学であった。科学とは思考過剰の病気であった。科学は何も理解しない。ダーウィンは自然を闘争とみた。かれはまちがっていた。」（pp.116-17）このブレイクを彷沸させるダンサー，ニジンスキーは，真の人生は感情を基礎にして築かれねばならないとして，聖なる運動体となり踊り，そして狂う。「わたしは単純な人間だ，考える必要などない。」と主張し，自分が狂っていることを否定する。彼らの定義する病理学的狂気は思考の病気なのだから。ニジンスキーの妻ロモラはブロイラーに治療を頼みこむが，かれは精神分裂症だから治らないと彼女に告げる。かれは4年間精神病院に入れられ，健康状態は悪化した。1923年ロモラは退院させたが，病院での孤独と投薬がかれの情熱の火を消してしまった。その後，入退院を繰り返す。これは精神病院が患者を退廃させた一つの例にすぎない。

5章「宗教と狂気」では，ウィリアム・クーパーが，6章「狂気と女」では，マージェリー・ケンプが登場する。マージェリーは最初の自伝を書いた中世後期のイギリス人女性であり，神とキリストとの異常な緊張関係のなかで幻聴，幻覚が生じ，狂っていき，神との結婚にまでいきつく。現代精神医学では，マージェリーはヒステリー患者と呼ばれるが，医者の治療は受けてはいない。だが教会の医師には調べられ，異端と紙一重であったようである。このあと魔女狩りが数世紀のあいだ吹き荒れる。

17世紀には狂気は男性のものであったことは，

ベツレム精神病院の正門をまたぐマニアとメランコリーの2つの像が，男であったことに象徴されている。「18世紀中頃から感受性の時代が到来して精神障害はやっと事実上『女性化』された。」(p.168)（この点は，エレン・ショワルター『心を病む女たち』（朝日出版，1992年）が，19世紀になるとベツレムの2つの像は覆われ隠されるようになり，一方，オペラ，ドラマなどで女性の狂気がロマン主義化されて演じられたことを見事に描きだしている。）フロイトが魅せられたヒステリー患者「ドーラ」もこの章に登場する。「3カ月ちかくフロイトのもっともらしい間違いを聞かされてドーラは立ち去った」(p.187) のは，よく知られた話であろう。それ以来，精神障害の経験を記録する女性の著作には，「医師と恋に落ちる」テーマが含まれてきており，その典型例は，メアリー・バーンズのジョセフ・バークに寄せる愛であるという。

7章「フールからアウトサイダーへ」では，18世紀のクルーデンが対象とされる。かれが狂人著作史で重要な位置を占めるのは，「かれがいつも理性に欠けるところなしと主張し，家族，隣人，そして愚かな時代などによって狂気のレッテルを貼られることに立ち向かい，活字で抗議行動をし続けた，おそらく最初の人だからでる。」(p.210) 8章「ダニエル・シュレーバー　狂気とセックスと家族」では，19世紀末，ドレスデンの控訴院院長シュレーバーが精神衰弱になり，女性化志向が強まるなかでおこるさまざまな問題（フロイトとの特殊な関係も含めて）を取り上げる。

9章「ジョン・パーシヴァル　狂気の監禁」は，本書のなかでも最も重要な章であろう。それは，19世紀になると，それまでの宗教的疑念と妄想，および家族の緊張関係の2つが狂人の自伝の主な関心事であったのにたいし，「精神病院（アサイラム）に監禁されることによる心の傷」が加わるからである。

パーシヴァルは首相の五男であったが，首相自身1812年に狂人に暗殺されている。かれは2つの精神病院での体験を暴露し，そこでの残酷な扱いを告発し，センセーションを引き起こした。その1つであるグロースターシャーのブリスリントン・ハウスは，開明的医者のクエーカー教徒E.L.フォックスにより3万5千ポンドの資金を投じて開設された私立病院で，「19世紀初期の最も定評ある地方認可病院の一つ」であった。パーシヴァルはその病院を「残酷なまがいものであり，いまわしい不誠実」であると告発した『語り』と題する本を刊行したのである。1845年「狂気法」が制定され，カウンティーに一つずつアサイラムを建設することが義務づけられると，その年に，パーシヴァルが中心となって「被疑狂人友愛組合」が設立された。その年にかれは，「近代的システムの栄光は，優しさと甘言による，また独房監禁による抑圧である」と言明し，45年法によりアサイラムが建設されることは，脅威の拡大であるとした。患者たちは入所するとまず最初に，「押しつぶされ」，それから「退所するときには，社会の抜け殻の存在として生きるようにされる」と訴えて，患者の視角から異議申立をおこなったのである。なんとフーコーの主張と似ていることであろうか。

10章「アメリカン・ドリーム」では，退院して『自己を発見した心』を刊行，院内の諸悪を告発し，「スーパーマン」と呼ばれるようになったビアーズが，W.L.ムーアと対照的に描かれる。11章「セラピーの神」では，「フロイトこそ，フロイトによってまた精神分析のテクニックによって，激しい神経症を治療してもらうべき最初の人であった。」(p.350) という観点から，「精神障害を経験した一人として，そして後に自分の人生の物語を語った人として，点検」(p.350) する。つまり，これまで扱ってきた他の患者と同列にフロイトの自伝を分析し，かれはパラノイア，誇大妄想，健忘症（かれの自伝は全く信用できない）であったとするのである。

以上が本書の概要であるが，ポーターの分析の特徴は，医師と患者の関係を近代の開始と展開の

なかで捉える点にある。「啓蒙主義はギリシャ人が狂気によせた信念を是認した（「われ惟う，故にわれあり」とデカルトは述べた）。そして17世紀半ば以降権威を帯びるようになった理性の時代は，その指導者が愚劣である，不合理である，と考えたものを片っ端から批判し非難し粉砕したのである。」（p.23）理性と狂気を隔てる境界線が啓蒙期に比重を増した。合理性礼賛は，科学技術の重要性，官僚制度の発達，法制度の整備，市場経済の繁栄，教育の普及と識字率の増加により強められた。それは社会の支配者にとっての「合理性」であった。「正常」なひとびと，つまり市民社会がもとめる規範に従う人々に「市民権」があたえられ，それ以外の人々を収容するために18・19世紀にヨーロッパのいたるところで，学校，監獄，労役所，感化院，授産所，マッド・ハウスができた。18世紀半ばから狂人を隔離するケースがふえた。治癒可能という信仰が生まれたためである。この点では，フーコーの「大いなる閉じこめ」論と共通性がある。しかしポーターは2つの点でフーコーと異なる。

第一は，中世をつうじて狂人にたいして特別な施設がつくられ狂人が社会から排除されることは殆どなかったし，ごく少数の狂人収容施設（ロンドンのベツレム病院のような）や僧院が収容するか，家族が世話をするか，村落共同体の監視下に置かれるか，歩き回るのを許されるか，であったということの評価に関わっている。少なくとも精神異常者を異人として隔離することはなかった状態をフーコーが讃えるのにたいして，ポーターはそれは福祉政策が不十分であったというだけのことであるとする。エラスムスの『痴愚神礼讃』に示されるように，愚者の声が神の声を伝える媒介かもしれないとして傾聴したのであるが，「フーコーは，この古き良き時代に狂気は実際に狂気なりの真理を述べて正気と徹底的に話し合った，と論じたことがある。私たちはこのロマン的原始主義にとことん同調する必要などない。」（p.23）と批判するのである。

第二は，狂人の隔離を主導したのは，医者ではないという点である。それを促進したのは，行政官，博愛主義者，家族であった。「精神病学が盛んになったのは，多数の患者が入院させられてからのことであって，それ以前ではなかったのだ。」（p.27）

ポーターによれば，医学は長い間狂気に関心をもっていたが，それを高めたのは科学革命によってもたらされた解剖学と神経学であった。精神と肉体の機械的モデルが登場し，知覚と行動の異常を説明するために中枢神経系が注目されるようになり，「神経症」の概念が重要になってきた。ジョージ3世が狂気ではなく神経症であるといい張ったのはその例証である。18世紀末にこうして精神医学が医学の一分野として成立し，精神病院運動がすすめられた。薬物療法を重視し，鎮静剤，刺激剤，浄化剤が投与された。医者たちは，身体的および機械的治療法も開発し，18世紀から一般化していた電気ショック，温浴，冷水シャワー，拘束椅子などを使い，その衝撃を神経にもあたえようとした。

やがて，啓蒙主義の時代に，進歩の名において，モラル・トリートメントを強調するようになる。このロマン主義精神医学者たちはロックの人間悟性論に依拠し，狂人は考える能力を全く奪われたわけではなく，理性が完全に破壊されているわけでもない，と捉えた。それは，狂気とは妄想であるから，狂人は子どものように扱う必要があり，厳格な精神鍛練と再訓練が必要である，まずそのためには，患者を悪影響から遮断し，精神のプログラムをつくりかえれば，必ず治癒する，とする楽観主義であった。パーシヴァルの入院していたブリスリントンとタイスハーストは，このモラル・トリートメントの考えを実行していた私立のアサイラムである。19世紀にはこのモラル・トリートメントが大規模に実行され，イギリスでは，1800年に5千人だったアサイラム収容者が1900年までには10万人になった（1950年には再び5万人に減少）。しかし治癒したものはわずかであり，

アサイラムは狂人の単なる収容所になってしまった。多くの狂人は治癒不能と言う結論は，19世紀半ば以降しだいに明らかになってきた。

そこで新たに興隆してきた医学理論は，狂気とは生得的身体病であり，遺伝によるかもしれないとした。生まれつきの体質であり，脳障害であるとする悲観主義であった。ダーウィン説がそれを促進した。19世紀末には「退行変性」論，すなわち，狂人を退化したものとみる説が普及した。「呪われた詩人」から，印象派，キュービズムまで天才的画家や文学者の退廃的作品のなかにも狂気が発見された。こういう天才を精神的・知能的・視覚的障害にかかっていると信じ，シューマン，ヴァージニア・ウルフ，ニジンスキーなどは，正常に戻そうとする精神病医と関わって，逆に精神的被害を受けたのである。フランス革命のときには楽観論が頂点に達し，狂人も束縛を解き放てば理性が回復すると考えられていたのが，それから1世紀たって悲観論が支配した。

これにたいし，フロイトの精神分析がもう一つの楽観主義的新機軸を提供した。自由連想による対話療法である。しかしフロイトもしだいに悲観主義を感じとっていく。かれの方法で治療できるのは，障害の軽い，神経症患者だけであり，精神分裂症等は対象外であったからである。

このような過去数世紀のなかで，患者は医者と出会い関係してきたのである。その進行過程で，一方では精神病医という専門的職業が出現し，他方では患者が，社会が合理的になればなるほど，目につくようになり，しかし，結局幽閉され，姿をみせなくなった。「狂人たちは，この事実を見逃さなかった。彼らは自伝で，精神病学がこのようにして偉ぶるけれども循環的であること，どこでも狂気を見いだしてしまうこと，をしばしば指摘した。というのも精神病学は，専門に治療する対象となる特徴を創作してしまうか，あるいは少なくともそれに注意を集中してしまったからである。」(p.36)。本書に示されたさまざまな物語は，「狂人が精神病学にたいしていだいた深い不信の念を証明している。」(p.38) それ故，この書評をニジンスキーがデカルトを揶揄していったつぎの言葉でもって終えるのが適切であろう。

「われ惟わず，故にわれ狂わず。」

松　村　高　夫
(経済学部教授)